

松江藩松平家の鷹書制作に従事した医師・儒者・絵師について

— 宮内庁書陵部所蔵鷹書・鷹詞の研究 —

三保 サト子

(島根県立大学短期大学部総合文化学科)

三保 忠夫

(神戸女子大学文学部日本文学科)

On Doctors, Confucianists and Artists Who Engaged in Transcription of the Falconry Books of the Matsudaira Feudal Clan of Matsue Han
— A Study on Falconry Books Owned by Imperial Household Library —

Satoko MIHO, Tadao MIHO

キーワード：鷹書 Falconry Books 宮内庁書陵部 Imperial Household Library
松江藩松平家 Matsudaira Clan of Matsue Han

一、はじめに

宮内庁書陵部編『和漢図書分類目録』（昭和二十六年作成・翌年三月発行、以下に『目録』と略称する）によれば、同書陵部には七三七点という多くの鷹書類が所蔵されている。その内の六三九点（八六・七割）は、松江藩の旧蔵書であり、これが昭和三年一月、まとめて宮内省図書寮に寄贈されたのであった（旧蔵書の一部は他機関にも寄贈された）。そのほとんどは松江藩で収集され、制作されたものである。これらの旧蔵書は、従って、同藩放鷹文化史上、好個の、かつ、不可欠の研究資料となることというまでもない。のみならず、この質と量とからすれば、日本の鷹書類・鷹詞に関する諸研究、ひいては日本放鷹文化史全般における諸研究においても多大の貢献が可能となること相違なからう。

書陵部所蔵の鷹書類については、宮内省式部職編纂『放鷹』（一九三一年、吉川弘文館刊）の「本邦鷹書解題」（福井久蔵執筆）において詳しい解説がなされている。爾来、八〇年になるが、未だこれを凌ぐ調査・研究は出ていない。ただ、解題という立場上のことであろうか、ここには松江藩放鷹文化圏についての解析・言及が乏しいように見受けられる。松江藩旧蔵の鷹書は、単なる、あるいは、偶々の集合体ではない、一藩あげて行なわれた集書活動の結果であった。とすれば、ここで問われるのは、『松江藩では、どのような事情のもとに、いつ、誰が、何を目的として鷹書を収集・制作したのか、それに従事し、協力した人物、その職務・職階、経歴、所在等はどのようなものであったのか、また、今日、この鷹書類はどんな意義を有するのか』ということであろう。

鷹書類の表紙や扉、奥書や識語の類、本文中などには『人名』が見えている。これらは、鷹書類の原著者、複写者、伝得者・伝領者、授受者、所蔵者、また、鷹術の相伝・相承などに関わる人物である。右の間に答えるために、まず、この『人名』を検討・整理してみる必要がある。現実のところ、それが原著者か転写者か、相伝関係者か伝領者か、明瞭にしがたい場合もある。原著にしても転写にしても、成立年代の不詳の場合も少なくない。だが、こうした問題を考えるためにも、この『人名』についての調

査・検討は不可欠であろう。

『人名』は、大きく、松江藩関係者、公儀御鷹部屋関係者、鷹術関係者（中世〔歌人を含む〕）、鷹術関係者（近世〔將軍家・旗本、諸侯、諸藩鷹匠等〕）、有職故実家・国学者、文人・絵師、僧など、未詳者（年代、所属、職種など）、の六類に分けることができる。機会の得られるならば、この調査結果を公表し、批判を得ていきたいが、膨大な紙幅を要するので、本稿では、松江藩関係者三〇余名（当該書との関わり方に濃淡があり、調査対象として扱いにくい場合、親子や一族の関係はどう数えるかといった問題があつて、細かな数字は出しにくい）の内の一部、「医師・儒者・絵師」のグループを取り上げ、松江藩旧蔵鷹書との関わりについて述べてみたい。

参考文献として、右『目録』、『放鷹』の他、松江藩『列士録』（松江神社旧蔵本、国文学研究資料館蔵本）、正井儀之丞・早川仲編『雲藩職制』（昭和五九年復刻、歴史図書社。安政二年度『御給帳』を含む）を用いる。

二、医師・儒者

【1】山本安良、館（山本）良臣

「山本安良」「館（山本）良臣」の父子は松江藩の御医師（儒医）である。まず、安良には次の著書がある。以下、○印は『目録』の書目、（松平）はその寄贈者松平家、1/163/1059は冊数・函号、末尾は頁数を示す。

○『鷹画題詩之註釈』 山本安良 自筆（松平）1/163/1059（『目録』、（右）

朝日丹波方の鷹画屏風讀詩十二首（「架上所何求」「嗚啼夜未休」「此声伝塞外」「群鳥碎心頭」などの詩句）を註釈したもので、首に遊紙一丁、本文一七丁の袋綴一冊、一面八行である。縦二四・九センチ、横一七・七センチ。奥には「右之通鷹画十二之題詩を註釈仕候得共私儀／鷹事不知案内之御座候上右之画様を親睹不仕候／故此註釈存外画意詩趣と齟齬（と齟か）仕候儀も可有／御座候且又此十二詩甚之悪詩ニ而平仄之配当さへ（と其）／行届不申文字使用も無理御座候程之儀ニ／相見候得は作者之作意も間違之儀も多分（中略）乙未六月 山本安良／右詩者朝日丹波方

鷹画屏風讀解」とある。乙未は、天保六年(一八三五)であり、安良の「医学教授」時代となる。「朝日丹波方」とは、七代目朝日丹波貴邦(天保九年三月一八日歿)の邸宅をいう。元祖朝日丹波は、結城秀康に召出されて二〇〇石を下されたが、一時浪人した。元和九年(一六二三)松平直直のもとにて浪人分で召出され、御合力米一二五〇石を下された。次いで、寛永元年越前大野で直政に召出され、同一〇年信濃松本で御合力米四〇〇石を下された。同一五年直政出雲拝領の節、知行七〇〇石(内二〇〇石与力)を下され、御家老を仰せ付けられ、同一八年七月一七日出雲で歿した。以後、松江藩松平家の世臣(譜代の重臣)として重用された。貴邦の祖父朝日丹波郷保(初茂保。生歿は宝永二年(一七〇五)二月)天明三年(一七八三)三月)は、財政改革で知られる。安政二年度「御給帳」に、「家老」の一人として「一、高参八〇〇石 / 内五〇〇石与力」朝日千助」と見えるのは、貴邦の嫡子八代目朝日千助である。

安良は、医学・本草学はもとより、儒学・漢学も修め、次の著作もある。

○『多加能布美 漢訳鷹書』 写 (松平) 1/163/1240 (『目録』、793)

二〇丁からなる袋綴の冊子本(縦二五・九センチ)で、原外題の題簽には「多加能布美 鷹書 初帙冊之一」とある。これは零本らしい。『古事記』

『日本書紀』『爾雅』『佩文韻府』『康熙字典』『和名鈔』『書言字考』『本草綱目』『本朝食鑑』『冠辞考』、その他、和漢の古典に見える鷹の記事を引き、語句・漢字について注釈する(漢字交じり片仮名文)。本書の著者につき、実名不詳、または、館良臣(『国書総目録』第五卷、五一六頁)とする説があるが、各注釈の首に「良阜曰」「良阜案スルニ」とあるから、著者は安良である。良臣(泰淵)は安良の子で、次の自筆著書がある。

○『鷹書集遺』 館良臣 弘化三年(一八四六) — 嘉永三(一八五〇) 自筆 (松平) 6/163/927 (『目録』、792)

原表紙の題簽・外題に「鷹書集遺 山本医物産家考 一(六)(左)とある。

和漢の古典に見える鷹の記事を引き、漢字交じり片仮名文で注釈する。第一〜三冊は、弘化四年に成書し、濃紺の表紙(縦二五・六センチ、横一八・三センチ)を付す。第四冊は翌嘉永元年に、第五冊は同二年に、第六冊は同三年に成書し、これらにはうす青い表紙(縦二五・二センチ、

横一七・八センチ)を付す。一冊目以下の丁数は、一三丁、二二丁、二三丁、二五丁、一六丁(尾一丁白紙)、二四丁である。第一冊の序に「弘化丙午六月館良臣徵聖氏謹二書於松江北甫里之賜宅簡齋中」、第三冊奥に「弘化四年歲次丁未十二月吉旦館良臣 / 述之簡齋之翠松窓下云爾」、第四冊奥に「嘉永紀元歲在戊申七月初三日讓之簡 / 齋翠松窓下云」、第五冊奥に「嘉永二年屠維作噩五月淨写於簡齋翠松 / 窗下云館良臣」、第六冊奥に「嘉永三年歲在庚戌騰月初八日館良 / 臣録之簡齋東隱幽裏云」とある(合符略)。

○『鷹百句賤註』 館良臣 安政四年(一八五七) 自筆 (松平)

1/163/1254 (『目録』、794)

新補表紙(戦前か)、本文三四丁の袋綴二冊、一面八行である。縦二六・二センチ、横一八・六センチ。其香(本田忠憲、別稿)の著『鷹百句』に良臣が注釈を付す。発句の条は漢字交じり片仮名文、注釈は漢字交じり片仮名文。奥に、「右安政四とせ後の五月中つ頃の日 / 瑤光大公の命二よりて聊か註解を讓するもの也 / 但し良臣鷹事ニは渡らすして俳道も亦淵 / 源の教ニ通せされは註中不当無美の事多く / 却て作者の本意ならざる事多からんを深く / おそれみはつる所なり / 良臣謹て誌す」とある。

良臣は、鷹詞や薬の隠し名などには必ずしも明るくはなかったようで、例えば、句中の「しのふの里の水」に注して、「忍里ハ陸奥の地名歟云ハ病ノツキテ」云々という。これは「春山の水也、むつけたる鷹に飼也」(書陵部蔵『多賀口伝抄』、163/1232)の意味である。

さて、儒医の山本家は、山本逸記—安良—泰淵(良臣)と続く。元祖山本逸記は、名を良克、号を礼夫、彰経という。『列士録』によれば、逸記の本国は不知、生国は山城とある。逸記講述・安良較『黄帝内经抄略八十一章』一冊の序文末に「文政龍飛初元歲在戊寅之九月九日 / 出雲藩特聘医学教授美濃国館良克礼夫敬識于 / 松江官寓之從容葆齋中廿年七十六六」と見えるから、逸記の本国は美濃国、生年は寛保三年(一七四三)と知られる。享和三年(一八〇三)三月一日、「御国」へ召し呼せられ、「医学教授」として仕えるべき旨を「京都御屋敷」において仰せ渡された。京都御屋敷とは、松江藩の京都留守居役所である。時の藩主は第七代松平治郷

である。逸記は同四月御国に参着し、同五月一六日より「医書講釈等相勤」めた。翌年二月召し抱えられ、二〇人扶持を下され、「御医師並」を仰せ付けられた。同四月願い上げて上京し、家内を召し連れ五月に帰国した。文政四年（一八二一）二月出雲にて歿した。享年七九歳である。

右は『烈士録』によるが、文部省総務局編『日本教育史資料』（明治二四年五月出版）の第九冊（昭和四五年五月の臨川書店の複製では第五冊）の「卷十二 学士小伝」の「旧松江藩」の条に、次のように見える。

○山本逸記ハ美濃ノ人ナリ。京師ニアリ。小野蘭山・浅井因南ニ師事シ、三十歳ニシテ郷里ニ帰り、医術ヲ開業ス。其後、浅井因南、医学ヲ以テ尾張藩ニ聘セラル。其嗣、尚少ニシテ業ヲ襲フ能ハス。逸記家ヲ挈ケ、復京ニ入り、医学并本草学ヲ以テ、権リニ小野家ノ子弟ヲ教授シ、旁ラ医ヲ業トス。享和二年松江藩主松平治郷ニ聘セラレ、優礼ヲ以テ待遇セラル。同四年二月遂ニ当藩ニ禄仕シテ式拾人俸ヲ受ケ、表医師ニ列シ、居宅ヲ賜ハル。因テ之ヲ書院トシ教授ス。文化三年藩主学規十一條目今其条自文面不相分ヲ下付シ、次テ典葉某ヲシテ存濟館ト書スル木扁額ヲ玄関ノ梁上ニ掲ケ、又藩主自筆ノ扁額及神農像ノ大軸ヲ下付ス。是於該院ヲ存濟館ト称ス。（一五五頁）

句読点は私に付した。文中の「家ヲ挈ケ」の「挈」字はヒツサグ、引き連れるの意、「権リニ」は一時的に、かりそめの意である。

「学士小伝」のこの条には、黒沢弘忠、長沢東海、宇佐美瀧水、その他、都合一一名の小伝が記されているが、漢文、漢字交じり片仮名文、漢字交じり平仮名文の三種の文体が混在している。小伝それぞれ筆者が異なるからであろう。逸記の伝が何人の手になるか不詳であり、ただ、旧松江藩の事情を知る人物が明治二〇年頃に草したものかと推測するのみである。

その就学期の事情も明らかでない。浅井因南は（生歿は、宝永三年（一七〇六）一月〜天明二年（一七八二）八月。享年七十七歳）、宝曆三年（一七五三）尾張藩医であった父浅井東幹の歿後、尾張に移ってその跡を襲う。逸記は、これ以前、「三十歳ニシテ郷里ニ帰り、医術ヲ開業ス」とある。とすれば、小野蘭山（生歿、享保一四年（一七二九）八月〜文化七年（一八一〇）正月二十七日。享年八二歳）の開塾前となってしまう。蘭山は、二

五歳時（宝曆三年）に開塾したという。また、逸記の文政四年時の歿年齢も一〇〇歳近くとなってしまふ。これらの点に不審が生ずる。もちろん、師事することは他郷にあつても可能ではある。小野家の子弟を教授したとする点については、年代的には無理はない。享和三年時、蘭山は七五歳、既に江戸に移っていたから、京都の子弟教育は高弟達に委ねられていたであろう。その教授陣の一人に逸記がいたとしても不思議でないが、この点も確証を得たいところである。

武田科学振興財団杏雨書屋所蔵『薇銜考一巻七種若菜辨証一巻』一冊（杏六〇九八。熊谷慎憲著『薇銜考』と松岡恕庵著『七種若菜辨証』との合冊）は、明和申（一七六四〜一七七二）の逸記（山本良克）の書写本である。また、架蔵『神農像』は、山口素絢の描く対幅（掛軸）で、彼はこれに讚を書き、「享和癸亥春日／山本良克謹書」と署名している。神農は、中国古代神話に見える農業神で、農耕や交易を教え、後に先農と祭られた。漢代以後には本草医学の神とされ（白川静説）、幕府の雑司ヶ谷薬苑（寛永一七年）、湯島聖堂（綱吉創設）の神農廟、幕府の医学館（家斉時代に官立）などにはその刻像が安置されていた。良克の享和三年春日とは、松江藩に出仕する直前である。これは「御国」に携行され、その医学館に掲げられ、後には存濟館の「神農像ノ大軸」の二本とされた可能性もある。

二代目安良の生国は山城といい、名号を館氏ともいう。名を良阜、字を景岐、号を安良、鸚鵡あひうという。京都の荻野元凱（生歿、元文二年（一七三三）〜文化三年（一八〇六））に学んだという。出雲に戻り、文政四年父の遺跡（一五人扶持）を下され「御医師並」、逸記に同じく「医学教授」を仰せ付け、往々御用立・家業出精を仰せ付けられた。天保の大飢饉の後、天保九年（一八三八）二月、仰せを受けて百姓の食延のため、山海産物を撰述し、御褒美二〇〇疋を賜わった。同一二年一〇月医学館教戒を仰せ付けられ、毎年銀七枚を下される。弘化三年（一八四六）正月八日、出雲にて乱心自滅した。「医学館」とは、右の「存濟館（館）」に相当する。

斯辞書刊行会著作兼発行者版新『大日本人名辞書』、下巻（大正一五年六月）では、「山本鸚鵡」を見出語とし、「最も本草に精はし。兼葭堂の深く推服する所となり、常に質疑を受く。嘉永年間歿す。著はす所出雲風土記、物

産考あり。また詩を善くす。(出雲詩綜)とある(二七七三頁)。兼葭堂とは、本草学・博物学、また、詩文・書画等をたしなむ文雅の人で大蔵書家としても知られた大坂の木村兼葭堂(名弘恭、字世肅、号巽斎とも)のことである。混沌社の一人で、生歿は元文元年(享和二年正月二五日。享年六七歳。安良の著書には、『鵜寮先生百絶句』一卷(良卓詠・良臣編)、また、『出雲風土記物産解』・『久末廻布美』二卷・一冊(天保一〇年自筆稿本、動物書)・『内経抄略校』・『麻由美乃事書』(天保一〇年、本草書)などがあり、前掲『多加能布美 漢訳鷹書』もその一つである。

三代目山本良臣(名号を館氏とも)は、通称泰淵、名を安暢、諱大ともいい、字を徵聖、号を簡斎、青浦、水川という。家業格別出精致し、相弟子の世話もよくするので、天保一二年(一八四一)一〇月一四日藩侯(松平齐貴)から御褒美二〇〇疋が下され、また、同一四年本草学・医学共に出精し、身持等も宜しいと御聴聞され、御褒美に銀一枚が下された。この旨は、京都で医学修行中の泰淵のもとへ仰せ渡された。

『列士録』には「京都」とのみあるが、この時期(天保一三年頃から一五年春か)、泰淵は、京都の山本亡羊(生歿は、安永七年(一七七八)六月一六日(安政六年(一八五九)一月二七日。享年八二歳)の門に学んでいた。武田科学振興財団杏雨書屋蔵『蘭山翁採葉記』(杏二一八)の巻頭に館良臣の識語があり、ここに「此冊蓋蘭山小野翁嘗蒙台命採葉乎(中略) 時天保壬寅之初秋京師客寓雲藩簡斎館良臣誌」とある。彼は、天保一三年七月山本邸読書室で本書を書写したと知られる。この頃、『天保十四年歳癸卯五月念一日読書室物産会品物』一卷(良臣著、雲藩茶梅園写本)の著があり、『救荒野譜筆講』一卷・『詩経名物辨解積義』一卷・『爾雅積義』一卷・『秘伝花鏡積義』二卷二冊(天保一三年)・『大和本草積義不分卷』一帙四冊などは亡羊の講述の筆録であり、『救荒本草記聞』二卷(亡羊口授・その子息篤庵筆録)の写本も残されている。同一五年四月一八日、在京中に自作した「本草学ニ相懸書籍類四拾九卷」を(藩侯に)献上したいと申し出、受納するとの仰せを賜わった。弘化三年三月一六日、御憐憫をもって父の遺跡を相続させ、一〇人扶持を下し、「御医師並」、家業等の出精を仰せ付けられる。同三月二三日に医学館、并せて医書御文庫

を預けられ、同四年医学教授、嘉永三年一五人扶持、同六年三月二九日「医学教授」出精するにつき、「御医師」を仰せ付けられる。安政二年の『御給帳』には、「側医格」の下の「医師」の内に「一、壹五人扶持 外銀七枚」として山本泰淵の名が見える。同三年一二月二二日には「御隠居様」(瑤光翁)の思召しをもって天助御紋羽織一が下された。同四年二〇人扶持に復した。同六年三月江戸勤番を命じられ(四月参着、文久元年三月帰)、同一一月四日「御隠居様御側医格」を仰せ付けられる(文久三年六月二六日御免)。安政六年一〇月四日御隠居様御手ずから葵御紋附羽織一を下される。文久元年九月から同三年五月まで江戸勤番、森林御殿に出仕する。慶応元年(一八六五)八月二日(医学教授)表医師上座に付け、毎歳銀三枚増下される。同八月一六日先に嫡子(泰肅)病死につき、森山文忠二男を養子とすることが許される。同四年三月一五日、また、同一年八月八日献金を許される。(以下、記載なし。明治六年一〇月五日歿。)

良臣(泰淵)には、雲州各地の採葉を行った折の『採葉記事』一冊の自筆稿本がある。帰松した天保一五年(弘化元年、一八四四)の四月一五日・同念一日・念八日・五月初九日・同三日・六月初五日・同二八日、医員・子弟・塾生・市医・知友・下僕などを伴い、また、時に父鵜寮(安良)に陪従して行った採葉記録(及び、詠詩)である。同行者の氏名、採取地、薬草名などは克明に記録されている。奥に、「雲州松江医学館教授／山本安暢識／改諱大名良臣号水川」とある。良臣には、本草関係の著作に『古今蘭草辨誤』一卷和漢蘭品一卷(一冊(弘化二年)・『草学漫抄』一卷・『物産書籍目叢覧』三卷(安政二年)、その他があり、前掲『鷹書集遺』や『鷹百句賤註』のような鷹書もある。『放鷹』には、「漢詩における鷹」として良臣の七言絶句が紹介されている(二二一頁)。

【2】田村寧我(令終)

「令終」とは、松江藩の儒学者田村寧我(ねいが)の諱である。

○『放鷹詩愚解』 令終 写 (松平) 1/159/354 (『目録』1796)

文部省総務局編『日本教育史資料』(明治二四年五月出版)の第九冊(昭和四五年五月の臨川(書店の複製では第五冊)の「卷十二 学士小伝」の「田松江藩」の条に、田村寧我歿して三年目、嘉永六年六月門人妹尾謙撰文による一文を取める。

田村寧我（生歿、明和七年（一七七〇）～嘉永四年（一八五二）七月一日。享年八二歳）は、字を子朗、号を寧我、通称を弥一兵衛という。水谷基命（維明）の四男で田村光武の養嗣子となった。長じて桃白鹿ももはくろくに学び、経史に通じ、詞芸を得意とし、書をよくした。同門園山西山（後に宇佐美瀧水門人）と馬融、及び、鄭玄の古註を研鑽し、古学派の道を歩んだ。もつとも三礼論語に精通し、学なり多くの門弟を育成したといい、その中に桃節山・妹尾精齋・河野天鱗等がある。天保十二年（一八四一）致仕して家屋を賜わった。著作に『寧我詩文集』『寧我先生三体帖』などがある。

三、絵師

【1】飯島助九郎

「飯島助九郎」は、松江藩の絵師である。かつて、洋の東西を問わず、絵師は重要な存在であった。芸術部門はもとよりのことだが、文字や音声ではできない、図形や色彩による事象の記録が可能であった。

飯島助九郎につき、『放鷹』に次のような一条がある（このような大緒繫形に関する写本は、書目『目録』と合）・冊数・所在等がはつきりしない。東京国立博物館に別置されているものがあるかも知れない。以下、同様）。

- 「○水戸黄門光國君御画架鷹大緒繫形 一
 - 万延元年九月大竹伊兵衛差出の一雛形。一
 - 松林堂好之助所持二枚折架鷹之絵大緒繫形。一
 - 万延元年飯島助九郎より差出。一
- 以上鷹画に見えたる繫形を紙捻にて作りたるもの。松江侯松平斉齋の制せるもの。」（五九一頁）

「架鷹」とは、大緒おほお緒で架おほに繫おほいだ鷹の（絵の）こと。大緒の結び方、色などには法式がある。「大竹伊兵衛」とは、大竹昌言（白鶴軒）のことであるうか。昌言は、公儀御鷹部屋雑司ヶ谷組の鷹匠同心であった。

また、『放鷹』には、次の一条も見える。

「○仙台塲場附 一

金華山鮎川浜鷹捉和泉屋善八所持のを飯島助九郎より差出せるもの。郡村毎に挙ぐ。その数八百に及ぶ。」（五三八頁）

陸奥金華山鮎川浜（今の宮城県石巻市鮎川浜）は鷹の名産地であった。「鷹捉和泉屋善八」は、そこに拠を置き、幼鷹を捕獲して納める業者である。その一帯の塲場とよば（鷹のねぐら、鷹巢）の調査書もあったはずである。さて、飯島助九郎の名は、松江藩の安政二年（一八五五）度『御給帳』の「勘定方目見不仕者」の条に、次のように見える（二六六頁）。

一、米六石七升七升／式人半扶持 絵師細工所用掛り 飯島助九郎
一五年後の明治三年（一八七〇）度の『御給帳』には彼の名は見えない。理由は分からないが、幕末から明治維新への騒擾期を経ている。転出、引退、あるいは、隠居といった事情も考えられる。

なお、天保・弘化の頃、鷹画に秀でた「飯嶋忠五郎良重」という人物がいた。紀州の御鷹部屋の人であったらしいが、右との関係は未詳である。

【2】西山其太、西山養之

- 「西山其太」は、松江藩の絵師で、関連する図絵（写本）に次がある。
 - 「條繫図」 弘化二年（一八四五）写／西山其太（松平） 1/B7/214（『目録』、780）
 - 「大緒繫形図」 西山其太 弘化二年写（松平） 1/B7/212（『目録』、781）
 - 「大緒繫形図」 西山其太 弘化二年写（松平） 1/B7/213（『目録』、781）
 - 「屏十二架之絵」 弘化二年写／西山其太（松平） 1/B7/215（『目録』、784）
 - 「白鷹之図」 野秋助右衛門原画 弘化三年写／西山其太（松平） 1/B7/204（『目録』、783）
- 野秋助右衛門は、雑司ヶ谷御鷹匠同心で、画名を栄秋という（別稿）。
- 「鶴之図」 中村新十郎原画 弘化三年写／西山其太（松平） 1/B7/209（『目録』、797）

一点目の「條繫図」、弘化二年写本につき、書陵部には「條之図」（天保七年写、一冊、B7/220）が、また、二、三点目の「大緒繫形図」につき、同じく「大緒繫形絵図」（嘉永六年（一八五三）写、神庭儀藏、一冊、163/1210）が、四点目の「屏十二架之絵」、弘化二年写本につき、同じく「十二架之図」（安政二（一八五五）写、寺田城八等、一冊、163/1224）が

ある。やはり、松平家旧蔵書である。これらは、それぞれ関わりがあるかも知れない。

『放鷹』によれば、「○御鷹画之内大緒繫形集 一(冊)」には、「同上(紀州殿鷹匠) 朴斎画天保七年西山其太写の画の内」、「天保六年秋阿州侯深川下屋敷にて移若鷹中山鑰次生写西山其太写の画の内」、「朴斎筆天保七年十二月西山其太写の画の内」など、西山其太の写した大緒繫形があり(五〇一頁)、また、「○中山栄次郎据前岩木川御鷹之図 一(冊)」にも、「紀州殿鷹匠朴斎筆天保七年十一月西山其太写」、その他の大緒繫形を収める(同書、五九六頁)。中山栄次郎は、安政三年(一八五六)から文久三年(一八六三)に公儀御鷹匠見習・御鷹匠を勤めた人物であり(安政四年に善大夫と改称する)、その父は、公儀の御鷹匠同心から御鷹匠(嘉永四年(安政二年)になった中山善大夫である)。

右『條繫図』以下、いずれも鷹術の作法・故事に関わる図絵集である。藩侯(齊貴)の指示による複写と見られる。齊貴は、鷹書を収集するだけでなく、絵図などの複製作業も意図していたと考えられる。『鳳十二架之絵』『白鷹之図』『鶴之図』などには芸術的な価値も多分に認められる。

さて、西山其太につき、安政二年度『御給帳』では「切米帳」の「徒」の部に次のように見える(一三九頁)。切米は、下級の家臣等に支給される扶持米をいう(禄は士分に、切米は徒以下にいう)。

一、米老参石 / 四人扶持 絵師並細工所軍用方掛リ 西山甚太「甚」とあるが、これは「其」字の誤植であろう。西山其太の事跡からすれば、『御給帳』に見えないはずはない。明治三年度『御給帳』では、「進士族役組」の部に「絵師 西山其太」として見えている(二五六頁)。次に、「西山養之」に関する書写本は次である。

○『黄鶴之図』 片山賢原画 天保一三年写 / 西山養之(松平) 1/B7/262 (『目録』、783)

後の表紙(濃紺)の題簽に「黄鶴之図」とある。天保一三年(一八四二)に西山養之が架鷹一幅(原画)を写した複製本一卷である(横四〇・〇センチ、縦一〇〇・二センチ)。原画は片山賢の筆になり、寸法は縦八七・七センチ、横三二・二センチ。黄鶴を架に据え、左背後から描く

(大緒は赤)。複製本の三箇所に必要な文言がある。

a (原画の上部) : 「文化十三年丙子之冬 / 十一月十三日大竹長好 / 奉宣命捕之於東武 / 稲附野衆拳為奇焉 / 応長好男昌言之需 / 写真其

片山賢□□ (陰刻・陽刻 / 二顆を模写。)

b (原画の左下外) : 「黄鶴 / 図 (天保十三寅初夏 / 下旬森正幸方ヨリ / 西山養之模写。)」 (内は細字三行)

c (料紙を横に寝かせた形の右端) : 「一文化十三年子年江戸近在三而移 / 一〇印与 同シ 鶴画人違由画ハ雜司ヶ谷御鷹匠同心片山勇八認候由 / 一若之節之由 / 一仕込ハ沼尻又三郎之由 / 右四ヶ条嘉永七寅年十月廿五日仕出シ十一月六日到着森寛之丞ヨリ申越」

「稲附」は、武蔵国豊島郡にあった稲附村、鷹の名産地(今の東京都北区赤羽西辺り)。片山勇八(賢)は、この絵を描いて「この黄鶴は」文化一三年(一八一六)十一月三日、大竹長好が仰せにより東武稲附野にて捕らえた、衆あげて素晴らしいと歎美した、長好の息昌言の求めにより、その真を写す」と記している。勇八は、森寛之丞正幸(別稿)に同様、雑司ヶ谷組所属の鷹匠同心である。放鷹文化史上、重要な人物で、絵画、俳句、狂歌、随筆、書などにも長けていた。寛政八年(一七九六)六月九日生まれ、嘉永六年(一八五三)八月一日卒、享年五八歳(別稿)。

「大竹長好・昌言」父子は、片山勇八・森正幸に同様、公儀御鷹部屋雑司ヶ谷組所属の鷹匠同心であつたらしい。「沼尻又三郎」は、勇八の親しい同僚で、その『文政十一年随筆日記』によく見えている。「仕込」とは、新鷹を調教(喰い付け、詰め、夜据以下)すること。

養之に関し、『放鷹』によれば、『御鷹画之内大緒繫形集』一冊には「紀州殿鷹匠朴斎筆養之写之御画の内」から集められた大緒繫形もあるとされる(五〇一頁)。片山勇八の原画を写した「西山養之」とは、右に同じく其太その人の別名か画名か、または、その近縁の者かであろう。

【3】 神庭儀蔵

「神庭儀蔵」は、松江藩の絵師で、大緒の繫形に関する絵図を写した。

○『大緒繫形絵図』 嘉永六年(一八五三)写 / 神庭儀蔵(松平) 1/63 / 210 (『目録』、781)

『放鷹』には、「○御鷹画之内大緒繫形集 一(冊)に「飛驒高山の巢鷹天保十四年七月神庭儀藏写の画の内」、その他の大緒繫形が収められ(五〇一頁)、「中山栄次郎据前岩木川御鷹之図 一(冊)にも「天保十五年七月神庭儀藏写」、その他の大緒繫形を収めるとある(同書、五九六頁)。更に、「○同上 一(冊)につき、「安政四年秋神庭儀藏より差出候分。六枚の内二枚繫四枚虫入につき繫形不相分とあり。」(同書、六〇三頁)とある。「同上」とは、直前の「橋本仙溪筆架台鷹画捲二枚繫方写 一(冊)」を承けるもので、これは、「安政四年江戸表より五月二十日仕舞御荷物便陶山重太より運送云々とあり。(中略)松江侯の制せられたるもの。仙溪は越前敦賀の人。小浜の酒井侯の画師。」(同書、六〇三頁)と解説されている(「陶山重太」は後述、「橋本仙溪」は別稿)。

安政二年度『御給帳』には、「細工方」に次のように見える(一九七頁)。

一、米壺五俵納／式人扶持

絵師

神庭儀藏

右の神庭儀藏の筆写本の他、書陵部には、西山其太筆写の『大緒繫形図』(弘化二写、1/B7/212)、同『大緒繫形図』(弘化二写、1/B7/213)、また、森正幸の手になる『大緒繫形集』(模型、37/163/1402)、その他が所蔵されている。これらはみな松江藩松平家の藏書であった。齊貴(齊齋)は、天保一四、五年から弘化、嘉永、安政四、五年にかけ、諸所から大緒繫形図を集め、また、森正幸などの示教をもとに絵師を使って複製本制作を行ったらしい。大緒繫形は、当時の文化儀礼に関与するものであり、架鷹(鷹画)の研究にもなくてはならない重要な参考資料である。

【4】陶山雅純

「陶山雅純」は、絵師であり、関係する写本(図絵集)に次がある。

○『鷹請取渡並同輩之人用見せ様見候之図』 森正幸／陶山雅純画

安政三年(一八五六)自筆 (松平) 1/B7/196(『目録』、786)

「陶山雅純」とは、森正幸(雑司ヶ谷組御鷹匠同心)と同世代の人らしいが、その同僚か周辺人物か、あるいは松江藩関係者か、また、絵師であったのか、はっきりしない。次の「陶山重太」との関係も問われる。「雅純」とは、絵師ならば画号であろうか。

【5】陶山重太(勝寂)

「陶山重太」は、松江藩の江戸絵師であり、後に「勝寂」と改号する。

○『兎筆之図』 陶山重太 自筆 (松平) 1/B7/213(『目録』、782)

○『船鴨羽合てん満船にたり船之図』 陶山重太 写 (松平) 1/B7/161(『目録』、798)

『放鷹』に、「森覚之丞の差図により陶山重太の認めたるもの。図面に一つ一つ寸尺を記す。てんまの全長三丈七尺一寸。荷足は二丈八尺八寸と定めたり。」とある(六〇七頁)。「羽合」は、鷹を鴨に合わせる、向かわせること。伝馬船や荷足船は、湖沼や鷹堀(引堀)などで用いる。

○『縹二而犬請取渡之図』 中田英太郎 安政五年写／陶山重太 (松平) 1/B7/260(『目録』、782)

○『仕込鷹之図』 森正幸校 写 (松平) 1/B7/218(『目録』、784)

料紙を横に用い(縦寸四〇・一センチ)、絵巻物風に仕立てる。彩色・漢字・平仮名文で、朱筆書込も多い。『放鷹』に、「辰四月五日出二ツ刻に、覚之丞へ遣候控とあり。一番より七番まで餌の与へやうの図を出し、名称の唱方その作法の可否につき意見を叩き、尚委細は重太にても聞かせ下されなど書入れたるところあり。数人の臣下に立案を命じられ森覚之丞へ送りて意見を徴したるもの。」(五二六頁)云々と解説されている。「辰」とは、安政三年丙辰の暦であろう。立案を命じ、正幸に意見を徴したのは隠居した齊貴(齊齋)であり、「重太」とは、この陶山重太のことであろう。意向に添っていないところがあれば、「其所ハ重太なりとも被仰付、何／番目と申渡御認被下何○絵図之間江切継被下可」云々と見える。

○『鷹図並架之事』 写 (松岡) 一 二〇七 一三八(『目録』、733)

旧松岡文庫本である。『放鷹』に、「○橋本仙溪筆架台鷹画捲二枚繫方写 一(冊)／安政四年江戸表より五月二十日仕舞御荷物便陶山重太より運送云々とあり。若大鷹、罫大鷹の二つの繫方。松江侯の制せられたるもの。仙溪は越前敦賀の人。小浜の酒井侯の画師。」(六〇三頁)とある。

この他、陶山重太の筆写に関しては、『放鷹』の解題中に次のように見えるものがある。即ち、「○金地手鏡架鷹右大緒繫形 一(冊)」「平賀縫殿

(松江藩家老並、高八〇〇石)所持の架鷹画に關係する)は、「陶山重太

写時大鷹と有之繫形」、その他の繫形が見えることあり(五〇九頁)、「中山栄次郎据前岩木川御鷹之図 一(冊)」は、「寛阿画鷹の大緒天保十年冬陶山重太の写」、その他の大緒繫形を収めるとある(同書、五九六頁)。

さて、陶山重太につき、国文学研究資料館所蔵『新番組列士録』によれば、「陶山勝寂拾八石 当分定江戸新番組五人扶持御絵師」として見えている。勝寂は、本国・生国共に出雲といい、安政六年五月二日家業格別出精せしむるにつき、出

格の訳をもつて士列に御取立て、一八石五人扶持を下され、新番組へ組入れられたとある。その高祖父は陶山十三郎(生国出雲)といい、享保九年月日郡足輕を仰せ付けられた。寛延四年五月月日不知郷組に召出され、御切米一五俵二人扶持を下され、郷方吟味役を仰せ付けられ、御役料を下された。

以後、格式万役人、御普請方懸合、佐陀川御普請懸合、出納方兼勤、格式小算用、鉄駄別切手方兼勤を経て御加増御給米一〇石となり、宝暦一三年月日不知郡中用米方元メ兼勤となり、明和元年八月一七日出雲で歿した。曾祖父陶山何左衛門(生国出雲)は、宝暦一三年一二月御勘定所見習、諸事御用手伝を相勤め、明和元年(一七六四)一〇月一一日父の跡式・御給米一

〇石を下され、格式万役人を仰せ付けられた。同一〇月一八日御貸方・所内年余方・千俵志儀寺用銀方役・足輕米加勢兼勤を、また、同三年二月五日御貸方残方并内改、同四年九月月日不知地方御雇を仰せ付けられた。同閏九月二日格別の御立派おたてはにつき、減入を仰せ付けられ、養料として二人扶持を下された。「御立派」とは、明和四年から始まった家老朝日丹波郷保さとうを中心とする経世済民の立て直し、即ち、藩政改革の理念を表す言葉である。何左衛門はその前兵の一人として働いていたと知られる。同五年正月二三日地方御用を仰せ付けられ、引続く年々の出郷に毎歳御褒美として銀二両ずつ下された。安永六年八月一九日地方竿頭を仰せ付けられ、安永七年閏

七月二一日召返され、御給米六俵二人扶持を下されて御勘定所へ出勤し、諸御用を相勤めよと仰せ渡された。以後、運送方・送注文方、留方・御役米方を勤めて、天明元年月日不知御加増三俵を下され、御給米京升九俵成し下される。更に、改方加勢、御給米方、雑用方兼勤、格式小算用、京大坂御勘定改等を経て寛政元年(一七八九)一二月二日御加増一三俵に成し下された。翌二年一〇月一六日出雲で歿した。祖父陶山十三郎(生国出雲)は、

父何左衛門の死後、婿養子となり、跡式御給米一二俵二人扶持を下され、格式万役人となった。御勘定所勤務、宗門方御用、地方御用、隠州方認物御用、運送方・送注文方を務め、寛政八年一〇月一十二日出雲で歿した。父陶山文超(生国出雲)は、安永七年三月月日不知願出て(藩主は治郷)自力で

江戸表に罷り越し、狩野養川院老へ引越し、絵修行仕った。天明二年五月月日不知帰国を願出て許されたが、御次より差留められ、絵修行を仰せ付かった。寛政二年月日不知狩野養川院老へ引越し、絵修行仰せ付かり、御次より御繪御用相勤めよと仰せ渡された。同三年月日不知若殿様(後の第八代藩主斉恒をいうか)御誕生の御繪御用を仰せ付けられ、相勤めて御褒美御目録を下された。同四年月日不知若殿様御殿向御繪御用に精出すにつき御褒美御目録を下された。同五年月日不知先年竹内春山へ仰せ付けられた童子御巻物手伝を仰

せ付けられ、同八年四月月日不知これが出来たので御褒美御目録を下された。同四年四月月日不知陶山十三郎跡式を仰せ付けられ、御給米一二俵二人扶持を下され、御細工人を仰せ付けられた。享和二年より天保元年まで、年々御褒美前に御褒美御目録を下された(文化三年三月治郷致仕)。文化二年(一八〇五)五月一七日米二俵御加増成し下され、剃髪して文超と改号せよと仰せ渡された

初名。文政九年月日不知御繪御用を相勤めるにつき、御褒美御目録を下された。天保三年一〇月五日格式御細工所竿頭格を仰せ付けられた。同九年月日不知悴次郎太は病身で御奉公覚束ないので、三男重太を嫡子とすることが許された。この間、旅役数度相勤めたが、弘化二年三月六日出雲で歿した。

陶山勝寂(重太)は、天保一四年八月二日軍用方御用懸を仰せ付かったが、同一五年四月一一日狩野晴川院老方へ隨身につき、引越し仰せ付けられた。弘化二年六月八日父跡式・御給米一四俵二人扶持を下され、格式御細工人を仰せ付けられた。弘化年間より万延元年まで、御席画せきゐを相勤め、度々御褒美を下されたと記録されている。席画とは、集会などの席上で依頼に応じて即座に絵を描くこと、また、その絵をいう。弘化三年一二月月日不知御鷹御用認物に精出し相勤めるにつき、御褒美百疋を下された。同年一二月二八日江戸詰中、加扶持一人扶持下された。同四年一二月月日不知御鷹御用精出し相勤めるにつき、御褒美一〇〇疋を下された。嘉永四年八月二日芝源宝院の繪御用に精出し相勤めるにつき、御褒美銀二両を下され

た。同五年八月^{日不知}西御丸御普請の御絵御用の師家の手伝を仰せ付けられ、公儀より御手当金を下された。同六年二月^{日不知}濟三郎様の御席画を度々相勤めるので御褒美三〇〇疋を下された。同二月二十五日家業格別精出し相勤めるにつき、格式小箒用を仰せ付けられた。濟三郎は、この年九月家督を相続して第一〇代藩主定安となる。それに関係するか、七月、一二月に御席画を勤め、銀二〇両を下されている。同七年一〇月一一日当分定府（江戸藩邸に詰めること）仰せ付けられ、狩野勝川院老の御所望により暫くの内、彼方へ引越し相勤めるよう仰せ渡された。安政二年一〇月二三日江戸表より御国に罷り帰る節、（御国の）南御殿御内の用に附添い出立せよと仰せ渡された。同二年一〇月二六日嗣子なきにつき、願出のとおり星野久米之助弟の婿養子を仰せ付けられた。同二月一七日観山御殿御絵御用数々相勤めるにつき、御褒美銀二両下された。同十一月一八日家内を召連れ御国を出立仕る。同十二月一日江戸表へ帰着仕る。同十二月二五日南御殿御内の用に附添い罷り帰ったにつき、御褒美金一両を下された。同五年五月^{日不知}大輿御席画を相勤めるにつき、御褒美二〇〇疋を下された。安政五年一二月^{日不知}御隠居様（齊斎（第九代藩主齊貴））御好御用に精出し相勤めるにつき、御褒美三〇〇疋を下された。同六年二月一九日御隠居様が剃髪を仰せ付けられ、寂の字を拝領仕り、狩野勝川老より勝の字を免許されるにつき、勝寂と改号を仰せ付けられた。^{初名}重太。旅役数度勤めた。

こうして、勝寂は、安政六年御取立となった。同十二月二九日御隠居様御用出精相勤めるにつき、御褒美二〇〇疋を下され、同日御隠居様御席画御用度々相勤めるにつき、御褒美二〇〇疋を下された。万延元年四月二日御隠居様御鷹御用認物に出精につき、御褒美として森林御殿（青山中屋敷）において二〇〇疋を下された。同十二月二日御客様の節、御席画、その外の御用向仰せ付けられるにつき、御褒美として御次に二〇〇疋を下された。同十二月二日当年中、御好絵御用出精し、相勤めるにつき、御褒美として御次に二〇〇疋を下された。同二月晦日御隠居様御好絵御用出精し、相勤めるにつき、御褒美として森林御殿において二〇〇疋を下された。

『新番組列士録』における記録はこれまでである。勝寂（重太）は、養父文超の代から絵師を家業とするものであったが、齊斎は、これに鷹絵、

あるいは、架鷹や鷹飼養関係の絵や図面などをも担当させた。松江藩の安政二年度『御給帳』には、「勘定方目見不仕者」の内に次のように見える。

一、米壹四俵／ 式人扶持、外壹人扶持当分増 当分定江戸絵師
陶山重太 (二七一頁)

「当分増」「当分定」とあるのは、この時分、彼が江戸表で多忙な任に就いていたことを窺わせる。現に、右には狩野勝川院雅信邸に住込み修行をしたと見えた。この間、陶山重太は、御公儀御鷹部屋の森覚之丞正幸等のもとにも出入りし、鷹・鷹術や作法に関する絵図、また、鳥屋・架や鷹堀などの図面を書写していたのである。明治三年度『御給帳』には、「準士族役組」の内に「絵師」として「陶山勝寂」の名が見える（二五五頁）。

なお、書陵部に『鷹請取渡之図』（写、一冊、B7/206）、また、『船鴨遣方法儀』（森正幸、嘉永元年自筆、一冊、163/974）が所蔵されている。松江藩旧蔵書であるが、やはり、右の『船鴨羽合てん満船にたり船之図』と関連するものであろうか。また、二点目の書名に見える「船」（伝馬船・にたり船）は、松江城三ノ丸の御花畑の中の御鷹堀（引堀）、御城下の御鷹堀、あるいは、砂村別荘などに用いようとしたものかも知れない。

四、おわりに

書陵部所蔵の鷹書類に見える《人名》の内、右には、松江藩の医師、儒者、絵師について述べた。当時の医業は本草学、博物学などと深く関わり、鷹の医方・薬方においてもこれらを応用することが少なくなかった。また、医師の中には中国古典に通暁して儒学をも修め、儒医と称される者もいた。松江藩の絵師につき、平素はどのような仕事をしてきたのか、必ずしも明らかでないが、本稿では、その活動の一端を知ることができた。次には、それぞれの制作物に秘められている情報の解析が必要となる。

なお、儒者につき、「田村寧我（令終）」に言及したが、この他にも「紀生直」「黒田直民」「外山幸（三安）」「阪昌文」「藤直秀」「藤原重礼」「藤原覃」「藤成裕」など、儒者か儒学生か、あるいは、その他のグループか、

松江藩との関わりがあるのかないのか、分明的でない人名も見えている。儒学者は中国風の名を用いることがあり、その実名や履歴をつかみにくいようである。なお、検討したい。

注

- (1) 島根県立図書館蔵(松江日本赤十字病院旧蔵)『黄帝内经抄略八十一章』一冊は、文政元年(一八一八)九月、山本逸記の講述内容を安良(良阜、景岐)が整え(較)、上梓に備えた二書である(写本)。原表紙(瑠璃色)を有するが、題簽(左に剥落痕)は剥落している。江戸時代後期写。筆写は安良であろう。寸法は縦二四・二センチ、横一六・七センチ。袋綴。楮紙。紙数は見返二丁、序三丁、本文三四丁、後見返(白紙)一丁。一面一〇行、版刷り罫線がある(雲州藩蔵存済館用箋)。漢字、絵なし。表紙の中央部に「官本」と大書(墨書)し、見返に「雲藩医学修定 / 黄帝内经抄略八十一章 / 本衙蔵版」(版本の扉に相当)、序文に「黄帝内经抄略序 / 先師因南藤子嘗語生徒曰(中略)」「二丁オ〜三丁ウ、末部は既出)、内題に「黄帝内经抄略」、内題の次に「出雲藩特聘医学教授美濃館良克礼夫述 / 男良卓景岐較」(四丁オ)、末尾に「右鈔略八十一章家嚴彰経先生所嘗筆録以蔵于家(中略)不肖男良卓謹識」(三七丁ウ)とある。印記、序題の下方に「松江医籍之記」(長方形朱印)。本文中には、黄緑色の塗料でもとの文字を塗消し、その上に訂正字を書いた箇所があり(安良の手か)、朱句点や上欄外に朱筆語句を記入したところがある。書写識語はない(これが出版原稿であるからかも知れない)。
- (2) 正井儀之丞・早川仲編『雲藩職制』によれば、京都留守居役所には、役組外留守居(二〇〇石勤)、新藩士調方、徒京都元メ並軍用方・人參取引用兼勤、万役人京都買物方並軍用方、同京都大阪勘定改・為替方の各一人、計五人(及び、小人一人)が勤務した(六三頁)。
- (3) 『日本教育史資料』の第四冊の「卷十 参照」所収の旧松江藩の「学事概略」の条には「旧藩主松平定安取調」という注記があるが(明治二四年五月出版、二五六頁)、「学士小伝」にはこうした注記がない。

- (4) 浅井因南は、尾張藩の藩医、本草学者で名を政直、字を夙夜、惟寅、通称頼母、因南、幹亭、号を篤敬齋という。京都に生まれ、一歳から松岡恕庵(玄達)に儒学、本草学を学ぶ。二一歳の時、父浅井東幹(東軒)が尾張藩医となって東行するが、因南は京に留まって開塾した。宝暦三年父の歿後に尾張藩医として名古屋に移る。塾は、後に尾張藩医学館となり、孫貞庵(第四代)、曾孫柴山(第五代)が館主となる。『砒腸録』(延享四年)『扁倉伝割解注』(明和七年刊)、『浅井先生惟寅発句集』『篤敬齋文集』(安永七〜天明二年)等、多くの著作があり、恕庵の著『怡顔齋蘭品』の序文を書く。(『尾張から見た日本と世界の医学史』(第24回日本医学会総会「医学史展示」図録、一九九八年三月)、『朝日日本歴史人物事典』(一九九四年一月、朝日新聞社、三四頁)、『国書総目録』(著者別索引、一一頁)等による)。
- (5) 小野蘭山は、通称喜内、諱は職博、字は以文、号は蘭山、別に朽匏子という。京都の人、本姓佐伯氏。父は職茂(従四位下、主殿大允兼伊勢守)、『用葉須知』一二卷(享保一一年刊)を著した松岡恕庵(延享三年七月一日歿。七九歳)に本草の学を受ける。二五歳の時、仕途の道を絶ち、医薬の外は戸を出ず勉学した。家塾衆(集トモ)芳軒を開き(初め河原町、後に丸太町、鞘屋町などに転居した。多くは丸太町か)、業(本草学)を講じた。天明の大火(同八年一月三〇日)で衆芳軒は焼失し、吉田立仙の家に避難した。蘭山は、寛政一一年三月江戸に召され、幕府の医官となった(七一歳)。月俸・宅を賜わり、本草を講じて医官の子弟を教授した。寛政一二年春から文化三年夏まで東八国・甲駿濃信勢紀等の国に採葉し、一書を成して上進した。明の李時珍(東璧)著『本草綱目』(万曆一八年刊)を講究したが、その講義筆録は岡村春益・孫小野職孝(子徳)たちによって整理・校訂され、『本草綱目啓蒙』四八卷(享和三年文化三年に刊行)として刊行された。蘭山は、実地に植物調査・観察を行って本草学の水準を高め、日本本草学を集大成した人物として評価される。以上は、松村操著『近世先哲叢談続編 卷下』(明治三一年四月再版)、『近世文芸者伝記叢書』第六卷、昭和六三年八月、ゆまに書房、二九五頁)。

杉本つとむ編著『小野本草綱目啓蒙—本文・研究・索引—「新装版」』（昭和六十二年一〇月、早稲田大学出版部）による。

(6) 武田科学振興財団杏雨書屋編『杏雨書屋蔵書目録』、一九八二年六月、七四二頁。

(7) 架蔵の『神農像』は、絹本着色、対幅、各縦九一センチ、横二九センチ。讀は、一幅（左方に笹竹を置く絵像）に（^{空白}）山本良克謹書／享和癸亥春日／神農之降 得而因之／究病之源 以類而推（後略）、他の一幅（右手に稲、または甘草を持つ絵像）に「仰惟神農植芸五穀／斯民有生 以化以育（後略）／享和癸亥春日（^{空白}）山本良克謹書」、絵像の左下隅に「素絢拝写素絢」とある。

なお、素絢（生歿、宝暦九年（一七五九））文政元年（二八一八）一〇月二四日）は、円山応挙（生歿、享保一八年五月一日）寛政七年七月二七日）の門下十哲の一人とされる。通称武次郎、字伯陸、後に伯後、号山斎。人物花鳥の画で知られる。

(8) 『朝日日本歴史人物事典』（二七六二頁、「山本良臣」の項。上田正昭、他監修、講談社出版研究所編集『講談社 日本人名大辞典』、二〇〇一年一二月、講談社、一九九三頁、「山本安良」の項。

荻野元凱は加賀金沢の人、字子原、通称在中、号台州（河内守）。元文二年生まれ、奥村良筑に学び、古方を唱える。朝廷に仕え、寛政六年皇子を診治して典薬大允を拜する。後、江戸に召され、躰寿館に講学したが、辞して朝廷に侍し、尚薬に補された。蘭学者平賀源内等と交わり、蘭方の刺絡を採用した。安永五年蘭館医ツンベルグ（J. H. DuRoi）参府の際、京都でこれと面接した。文化三年歿。享年七〇歳。著書に『吐法篇』『刺絡篇』『麻疹篇』『知足斎梅花無尽蔵按定』などがある（日本学士院日本科学史刊行会編纂『明治前日本医学史』、第五卷（昭和三十二年、日本学術振興会発行）、三七六頁）。

(9) 先学は、多く、文化三年に「存濟館」と命名し、初代館長を父逸記としたとされる（米田正治著『島根県医学史覚書』（一九七六年一〇月、報光社刊）、五頁。佐野正巳著『松江藩学芸史の研究 漢学篇』（一九八一年二月、明治書院）、三一四頁。斯編集委員会編纂『島根県大百科事典 上巻』（一九八二年七月、山陰中央新報社刊）、九四

四頁）。しかし、「学士小伝」の書き方では、「存濟館」という命名が文化三年であったのか、その後のことであったのか分明ではない。先に「学規十一条ヲ下付シ」と見え、後に「次々典薬某ヲシテ存濟館ト書スル木扁額ヲ……是於該院ヲ存濟館ト称ス」と書いてある。「存濟館」の命名（改名）は、文化三年より下るのではなからうか。

「存濟館」の所在地につき、「天保一一年（一八四〇）正月、二代山本安良の世に同じ北堀の藩士三嶋儀右衛門（奥田官左衛門組、式〇人扶持、筆頭外小人壺人自分抱）宅に移動することとなった。そして天保十二年、敷地内に文庫を建築し藩所蔵の医書を収めたのである。（佐野正巳著『松江藩学芸史の研究 漢学篇』、三二二頁）とされる。

「存濟館」の読みは「存濟館」（高根県大百科事典 上巻）、九四四頁）、「存濟館」（右『講談社 日本人名大辞典』、一九九三頁。『朝日日本歴史人物事典』、一七六二頁、「山本安良」の項）とゆれるが、古くは医学用語に呉音読が多いので、今「存濟館」と読んでおく。

(10) 掲げた著書は『国書総目録』（著者別索引、九二四頁）、『国書人名辞典』第四卷（一九九八年一月、六四六頁）による。『内経抄略校』等、先代の手になる稿本が混在している可能性もある。

(11) 「山本亡羊に本草学をまなぶ。」とされる（右『講談社 日本人名大辞典』、二〇〇一頁）。山本亡羊は、京都の人、名を世孺、字を伸直、通称を永吉、号を亡羊という。儒医山本封山の二男として京都に生まれる。父に儒学・薬学・本草学を学び、安政六年（一七九四）「年一六にして小野蘭山の門に入り本草学を研鑽す、蘭山の江戸に移りし後は其門人の多くは亡羊を師とす。」という（既出の『明治前日本医学史』、第五卷、三八九頁）。薬草園を設け、家塾読書室に多くの門人を教え、物産会を催し、京都本草学を主導した。著書に『懐中食性』『洛医彙講』『医学字林』『格致類篇』『百品考』『救荒本草記聞』『ドドネウス本草書』（「ドドネウス」は、ドイツの博物学者レンベルタス・ドドネウス Rembertus Dodoneus 著の本草書（蘭語本）。万治二年蘭館長ワーヘナール Zacharias Wagener が江戸参府の時、老中稲葉美濃守正則に贈った）など、本草学を主とする多くの著作がある。下京区油小路通五条上ル西側上金仏町に邸跡がある。（服部敏良著『江

- 戸時代医学史の研究』(一九七八年二月、吉川弘文館)、四四一頁)
- (12) 平野満「小野蘭山「採葉記」の成立と転写系統の検討」、『駿台史学』、第一二四号、二〇〇五年三月。
- (13) 本『採葉記事』(通称「雲州採葉記事」)の伝本に杏雨書屋蔵本(目筆稿本)と岩瀬文庫蔵本(異本)とがある。前者は杏雨書屋に所蔵され(杏五二二一)、後者の写は、国立国会図書館(『近世歴史資料集成』第二期第七卷『採葉志』②)(一九九六年、科学書院)に影印を収める)・杏雨書屋に所蔵される。なお、千葉大学附属図書館蔵(亥鼻分館古書コレクション)にも『雲州採葉記事』の所蔵がある(整理番号987)和漢105、東医研番号72098)。翻刻に、田籠博「雲州採葉記事」(『島大言語文化』、第四号、一九九七年)がある。
- (14) 『国書総目録』(著者別索引、補訂版、「山本簡斎」、九二四頁)、『国書人名辞典』第四巻など、参照。
- (15) 佐野正巳著『松江藩学芸史の研究』(既出)、五四五頁。
- (16) 桃白鹿は、享保七年一月至日、石見国安濃郡河合の医師坂根幸悦(方寿)の長子として生まれた。幼名友之助、後源蔵、名を盛、字を子深、号を白鹿という。太宰春台の門人桃東園の養子となり、昌平饗で五代目大学頭林鳳谷に学ぶ。朱子学に偏せず、折衷学派に属したとされる。宝暦七年一〇月七日出雲に儒者として召し出され、新知七〇石、学校料米二〇俵、銀一〇枚を下された。翌八年藩校文明館(後、明教館)の教授となる。享和元年八月一九日出雲で歿した(『列士録』)。享年八〇歳。『世説新語補考』、同「補遺」、その他の著書がある。以上、佐野氏著書(注15の「第三章 桃白鹿」、その他)、磯辺武雄「新史料・松江藩儒桃白鹿『要記第壹』について」(日本大学文理学部教育学科『教育学雑誌』、第二八号、一九九四年三月)、同「松江藩儒桃白鹿『要記第三』について」(『国士館大学文学部人文学会紀要』、第二九号、一九九六年一〇月)を参照した。
- (17) 市古貞次、その他編『国書人名辞典』、第三巻、一九九六年一月、岩波書店。二四三頁。
- (18) 狩野養川院、名は惟信これのぶ、江戸後期の幕府奥絵師、法印。栄川院みちのぶ典信の長子に生まれ、木挽町狩野派七世となる。生歿、宝暦三年(一七五
- 三)文化五年(一八〇八)、享年五五歳。
- (19) 竹内春山は、未詳。但し、松江藩の絵師であろう。『御給帳』(安政二年(一八五五)度)の「万役人目見不仕者」の条に、「一、米壹九俵壹斗五升／参人扶持 絵師 竹内栄之丞」と見える(一八八頁)。年代上から推せば、これは竹内春山の子息であろう。
- (20) 狩野晴川院、名は養信おさのぶ、江戸後期の幕府奥絵師、法印。八世伊川院栄信の長子に生まれ、木挽町狩野派九世となる。生歿、寛政八年(一七九六)弘化三年(一八四六)、享年五六歳。模写を通して先人の絵に学び、江戸城西御丸・本丸御殿の障壁画を指揮した。『公用日記』五六冊も貴重な史料とされている。
- なお、羽山重樹筆録『御用頭書』の文久三年五月一日の条には、直指庵(斎斎。同年三月一日歿)様の「御遺物」として、「勝川画」(絹地)一枚ずつを村上徳輔に、「晴川画」(絹地カ)一枚を広江益蔵に下されたとある。村上徳輔は斎斎の下で御鷹方を勤めた人物である。広江益蔵については未詳である。
- (21) 源宝院は浄土宗、東京都港区芝大門一丁目一〇一―一六に現在する。
- (22) 狩野勝川院、名は雅信、江戸末期の幕府奥絵師、法印。晴川院養信息、木挽町狩野派一〇世。生歿、文政六年(明治一三年、享年五八歳。

〔謝辞〕

一連の調査には、宮内庁書陵部、国立公文書館、国立国会図書館、東京国立博物館、国文学研究資料館、東京都立中央図書館、東京大学史料編纂所、早稲田大学図書館、立命館大学図書館、島原図書館、島根県立図書館郷土資料室、島根県立大学松江キャンパス図書館の御高配をいただき、職員各位の御指導をたまわった。記して御礼申し上げます。(二〇一〇年九月一七日稿)

(平成二十二年十一月二十六日受理)

